

「社会学的記述」について

岡田光弘[†]

まえがき (エピソード1 難解さ)

「社会学的記述」は会話分析の始祖である Harvey Sacks の著作としてつとに有名であり、M. Weber や E. Durkheim といった社会学者の業績を取り上げ、その方法論上の問題点を一刀の元に切り捨てた分析の切れ味は見事としか言いようがない。またそれと同様に、その難解さはひろく知れ渡っている。海外のエスノメソドロジストに「社会学的記述」について邦訳の企画があると伝えたとき、かれらの反応は、一様に「それは素晴らしい。訳が完成したら、それを英語にして送って欲しい」というものであった。このジョークの前提には、この論文 (の一部) がネイティブ・スピーカーにとっても難解なものだということがある。01. 本稿では、「社会学的記述」について、その論旨が明快であり、従来の社会学の問題点を鋭く指摘した「エトセトラ問題」についての部分ではなく、論文の中心的なメタファーでありながら、唐突に出現するように見え、この論文の分かりにくさの原因ともなっている「コメンテータ機械」について若干の解説を試みてみよう。

1. 観察科学としてのエスノメソドロジー

サックス (Sacks) は、観察科学としての社会学を構想していた [岡田 1995]。これは実際に起きていることを観察し、それに基づいて、理論を作り上げる社会学である。そのように考えると、

さしあたり、「社会学的記述」における「コメンテータ機械」は、実時間における行為を研究するモデルを提示しているとみることができるだろう。後年、実際の発話を行為として扱うという「社会学的記述」の構想は、会話分析 (CA) として現実のものとなり、隆盛を極めることになる。それは発話が接続していく詳細を行為の接続 (シークエンス) として扱うというものである。

シュグロフ (Schgloff) によれば、サックスはすでに「社会学的記述」が執筆された当時 (1960年代の前半に) 観察科学としての社会学を構想していたという [Schgloff 1992]。「コメンテータ機械」というメタファーは、この論文でのサックスの主張に機械論的な印象を与えるものである。Harold Garfinkel の高弟であり、サックスの指導を受けたこともある Michael Lynch はサックスが用いている機械論的語彙については否定的であった。リンチ (Lynch) は、その著書では、ギルバート・ライルのカテゴリー・ミステイクという用語を挙げて批判的に論じている (Lynch 1993 = 2012: 265)。

リンチは、別のところで「社会学的記述」の論点を「実践についてのメンバーによる記述は社会的な記述である」(Lynch 1993 = 2012: 240) と要約している。これは、具体的には、以下の部分を指すものであろう。「一つの規則が常に留意されていなければならない。それは、わたしたちが主題として取り上げるものは、それが何であれ記述されなければならないという規則だ。なんで

[†] 国際基督教大学教育研究所 okada@emca.net

あれ、それ自身が「すでに」記述されてしまっているのではなければ、わたしたちが主題として取り上げるものはわたしたちの記述装置の一部として登場することはできない。ここでの「それ自身が「すでに」記述されてしまっている」ということは、どういうことだろうか。そして「それ自身が「すでに」記述されてしまっている」ものについての社会学者による「記述」とはいかなるものなのだろうか。読者が謎を掛けられたと感じたまさにその直後、「コメンテータ機械」というメタファーが「唐突」に出現する。

ここからは、サックスの初期の著作から、「コメンテータ機械」というメタファーについての理解を増し「社会学的記述」を読みやすくするための補助線に示したい。

2. 「見る人の公準」と「聞く人の公準」

「コメンテータ機械」からは、「見る人の公準」と「聞く人の公準」(Sacks 1972) についての萌芽的な見かたがみ取れる。すなわち、「コメンテータ機械」が成り立つには、行為を連接させることのできる能力や堪能さ、すなわちそこでの成員性が前提になっているのである。リンチによれば「サックスにとって、ある対象を他の人々と同じように見るといふ素朴な能力は知覚とか認知といった問題なのではなく、むしろ成員性の問題であった」(Lynch 1993 = 2012: 257) という。さらに「見る人の公準」は、後年の「成員性をカテゴリー化する装置 (MCD)」という発想につながるものであろう。そうして、この「成員性カテゴリー化分析 (MCA)」は、従来の社会学による社会的記述の不備を指摘し、あらたな観察科学としての社会学の基礎になる分析だということになる。02. この点について、リンチは、「社会学的記述」の論点を「『メンバー』とは関連する科学技術へ

の習熟のことを意味している」(Lynch 1993 = 2012: 414) としている。

ところで「社会学的記述」執筆後のサックスの考え方の展開は、以下のように示することができるだろう。

「すでに形になっているどんな科学にも属さないような研究の領域が存在している。この領域は、研究者たちによってエスノメソドロジー研究／会話分析と呼ばれるようになってきた。人々が社会生活を行なっていくときに使用している、いくつかの方法を記述しようとする研究領域である。私たちの主張とは、まだよくは知られていないにしろ、この研究領域が記述している諸活動の範囲、その記述のモードがあるということである。そして、そこでの方法は本質的に安定しているということである。…実際の、自然に生起している社会的な活動が起こっている詳細な方法は、形式的な記述の対象となりえる。…社会的な活動－それらについての実際のひとつのシークエンス－は、方法的に生起している。すなわち、それらの記述は、人々が採用している形式的な手続きの組み合わせを記述することから成り立っている。…この知見は、社会学が何を目指せるのか、そしてその目標に向かって、どのように進んでいけばよいのかという問いにとって、重要な意義を持っている。端的に言って、社会学は自然な観察科学になりうるのである」(Sacks 1984)。

そして、この路線で実際の研究が進められた。それらは会話のシークエンスの研究としてなされ、「ターンを単位としたやり取りのシステム (Turn-taking System)」の研究として結実する。

この「社会学的記述」論文から CA へという流れは、「社会学的記述」論文における記述という

ものをメカニズムの記述として読み取った場合の展開だろう。しかし、「社会学的記述」論文から読み取れるものは、方法とその記述という単純なものだけではない。先にみたメンバーが成員性に従って「どう見るか」「どう聞くか」と同様に、社会学者がそれらを「どう記述するか」という問題がある。この点について考えるための補助線として、しばしば見過ごされている論文での以下の部分が重要であると思われる。

「社会学は自然で観察可能な科学でありえる。…どうやって、自然な観察科学としての社会学が可能であることを示せるのだろうか。…人間のどんな活動でもそれが方法的であるとして適切に記述されうるなら、適切に科学的に記述されているとってよいのではないだろうか。…人間の諸活動が記述可能な形で方法的である、すなわち方法的な行為であるならば、自己-記述が用いられているかどうかといったことはまったくレリヴァントではないと思っている。-後者はただより精緻化された可能性だと思われるだろうということだけである。」(Sacks 1992)。

ここから言えることは、社会学者による記述は、メンバーの方法の記述として成り立つということである(前半)。しかし、社会学者による(社会学をするという実践についての)自己・記述となれば、それは「成員性カテゴリー化分析(MCA)」を経たものである必要があるということもいっていないだろうか(後半)。

「社会学的記述」が社会学にとってもつ意味の要点を(Lynch 1993 = 2012)のまとめにしたがって繰り返すなら、「科学者による自身の活動についての報告が適切であることは、すなわちその報告が何らかの方法を用いて当の活動を彼らの

あいだで再産出できるように保証しているということである」(Lynch 1993 = 2012)。さらに対象を観察科学としての社会学に広げるなら、「何らかの方法に従っていると言っているあらゆる人間活動は、科学と同様な仕方で記述することができる」(Lynch 1993 = 2012)ということが重要である。リンチはこうした考え方をガーフィンケルの「教示による(再)産出可能性(instructable reproducibility)」(Lynch 1993 = 2012)と重ね合わせる。先に挙げた「それ自身が[すでに]記述されてしまっている」ものについての社会学者による「記述」とは、社会学者はメンバーが用いている道具に何も付け加えることなく、メンバーの行為を記述すべしという、ガーフィンケルの「方法ごとの固有性(Unique Adequacy)」という指針[cf. 前田・水川・岡田 2007]ともつながるエスノメソドロジー独特の考えかたをあらわすともいえるのではないだろうか。

おわりに

「社会学的記述」における「コメンテータ機械」は、実時間における行為を研究するモデルを提示している。この機械においては、行為を接続させていく「報告」というメカニズム(古典的なアカウンタビリティ)が「記述」であったと思われる。社会学者の努めは、メンバーの行為の接続を可能にしている、(言語による報告以外にもありうる)道具を特定し、そのメカニズム(自然なアカウンタビリティ)を報告(自己・記述)できるようにすることなのである。

さて、これで、論文の中心的なメタファーでありながら、唐突に出現するようには見え「コメンテータ機械」というメタファーについての理解が増し「社会学的記述」を読みやすくなった、のだろうか。

付論：以下は、サックスによる「序論」の概略である。

0.0

社会学にとって、この巻に納まっている二つの論文の示すもともと中心的な知見とは以下のようなものである。

第一に、実際の自然に生起している社会的な諸活動がそこで起こる詳細な仕方というものがフォーマルな記述にしたがっているということである。そして第二に：そうした記述というものによって、その詳細において実際の諸活動が単純であるという当たり前でない仕方を見せてくれるということである。こうした知見（この術語はここでの主張がこれから述べる調査から得られたということを描き出すために強調されている）は、一体何を社会学が目指すことができるのかにとってきわめて重大なことである。簡単に言えば、それは社会学が自然で観察可能な科学でありえるということである。

0.1

この論文には、以下のようなさまざまな知見が含まれている。

そうしたカテゴリーに関して会話が起きているカテゴリーを組織化するということは、非-会話的な出来事の生起と記述可能な形で深く関わっている。

社会的な諸活動、そうした諸活動の実際の一回性を持つシーケンスは、方法的に生起している。すなわち、そうした記述とはメンバーが採用しているフォーマルな手続きのセットを記述することから成り立っている。

諸活動を産出するためにメンバーが採用している方法は「メンバーに気づかれて話の」トピック

とはならないかたちでレリヴァントである。すなわち、知見は直観的には目に見えない形で一般化されている。

まさにその方法的な性格の中にこそ社会的な諸活動の単純さが存している。

一回的な出来事をフォーマルに記述することは、いつでも再現可能で使用可能な記述をもたらしてくれるだけではなく、そうした記述はまた、認識されているトラブルの基盤を特定し、多分そうしたトラブルの解消に役立つ処方を与えてくれる。

0.2

この論文によってわれわれは、社会学にとってある種の根本的な困難をはっきりと鮮やかに提示することができる。：そのいずれかに言及することで母集団の誰でもが分類されることになる代替可能なカテゴリーの集合をメンバーたちが使えるということは、メンバーたちが何らかのカテゴリー化を行なうすべてのケースのそれぞれにおいてどうやってメンバーたちがそれを行なうかを記述するという固有の課題を社会学者に割り当てる。すなわち、彼らが採用しているカテゴリーを含むカテゴリーの集合のレリヴァンスと特性とを与えるために彼らはどういった方法を用いているのかということの記述である。そうした方法が記述されたときにだけ社会学者は、ある人が「白人」であるとか「男性」であるとか「中流階級」であるとかといった主張をありきたり-には-なく行なうことができる。彼がそのように振る舞い、またそうするときには、ある人は彼の分析にレリヴァントな情報を意図的に運んでいるのである。

0.3

この序論の中での私の目的は、読者にひとつの議

論を提供することである。その議論というのは、われわれが実際に提出した知見を示していること、理解可能性のための直観的な基盤である。つまり、わたしが読者に提供したいのは社会学という自然な観察の科学のための基盤なのである。こうした基盤を構築することにはいくつかの目的がある。まずは、われわれの知見がなにも驚くべきことではないものとしてみることを示唆したい。これらの知見に驚きをもたないようにするためには、多分、社会学者たちが社会的諸活動についてもっている見方に劇的な変更を求められるだろう。第二に、この基盤の目的は以下の方角性に限定されている。科学が現存しているという事実のもつ意味について考えるべきであって（議論の都合上ここでは科学から社会学を除外している）、科学が現存しているなら、それは社会学の可能性にとってきわめて有力な証拠になるということだけ示してみたい。

0.3.1

科学が現存しているということを疑うこともできようが、もし読者が社会学の可能性に疑いを差し挟むためだけにそうした科学の実在性について疑わざるを得ないのなら、それで私が困るようなことはない。自然科学者と社会学者たちは、自然科学（社会学は除く）は現存しているが社会学の可能性は特に問題なく疑い得ると想定するのが常である。自然科学の実在性について疑っているような社会学者や他の人々たちの主張はここでは考えに入れないでおく。

0.3.2

つまり私は、社会学の実在する可能性が他の諸科学が実在する可能性程には確かな足場を持つことをつよく望んでいるのだ。再度ここで述べておきたい。すなわち、この序論で私は社会学を行なう可能性に向けての議論以上のことをするつもりは

ない。あるいはむしろ、社会学を行なう可能性に向けての議論のために、社会学の基礎たり得るものがどんなふうなものかを示唆したいのだ。今ある社会学は、これとはまったく違った手続きに依存している。簡単にいって、今ある社会学は調査とそうした調査によって得られた知見に依存しているのだ。可能性の問題が当てはまらないと思っている人々にとっては、きわめて単純なやり方がある。すなわち、すぐさまこの巻に収められている論文にあたってみることである。

0.4

それでは、どうやって、自然な観察科学としての、社会学が可能であることを示せるのだろうか？ 次のように進めていきたい。科学が現存していることを仮定すれば、問題なく承認されるある事実を提示してみよう。そしてそれらの重要な意味について考えてみよう。わたしが示唆したい重要な意味は単純である。すなわち、それは、社会学の存在可能性である。

0.4.1

数年前、ここで取り上げる調査をはじめ前のことだが以下の問題に突き当たっていた。それは、人間の諸活動の記述が安定的になされるということは可能であろうか、というものだった。ここでの「安定的」という言葉によって、神経生理学やその他のそうした類の記述によってのみ適切になされるような類のものをしようとしているのではない。安定的な神経生理学的な記述というものがあることはきわめて明らかであるように見える。問題は、人間の行為を記述しようと望んだときに、そうした類の記述以外のものは不適切であるとされるということなのだ。

0.4.2

人間の諸活動を記述すること、すなわち、相互行

為といったものについて記述が、厳密さを欠いた生物学となってしまうのではなく、その代わりに生物学者たちに探求への課題を与えるのに役立つぐらい精確で適切な記述となることを想定することは、すくなくとも可能である。諸活動の記述に可能な安定性を必ず与えるような根拠というものがあるのだろうか？また、それ以上に、そういったものが仮にあったとして、そうした記述はどのような姿をしているのだろうか？私がおっとも関心をもっているのは、まさに後者の疑問である。私にとっては神経生理学的な探求が可能であるかどうかというのは問題ではないし、実りがあるかどうかというのも問題ではない。それについてはただ放っておきたい。

0.4.3

こうした問題について考えていく中で、きわめて単純な観察にたどり着いた。すなわち自然科学をする、実際には生物学の探求をすること、は報告可能なものかであるということだ。これが第一である。そして第二に、科学をするという活動を報告することは探求中の現象の報告が取っている形式をとるというわけではないということだ。

0.4.3.1

すなわち、少しのあいだ二番目の点に拘ってみるならば、生物学者たちが自分たちの研究について同僚たちに報告するときには、生物学的な操作に探求活動を位置付けることなしでも効果的にそれを行なえる。彼らは自分たちがしたことを自然主義的な観察にとって接近可能であるような仕方でも報告できるし、そのようにして接近可能な報告こそが適切な報告である。そうした報告は明らかに安定しており、そうした報告は明らかに記述である。そういったものが安定した記述である。というのは、もしそうであると想定しないなら、実際に科学があるということを見て取ることが本当に

困難であるということになってしまうからである。つまり、もしわれわれが、科学というものが現存している、と想定せざるえないとするなら、われわれは、彼らが観察している現象の諸活動について報告することが科学であるという、まさにそういった意味において、科学者による科学者自身の諸活動についての報告は科学であるということをも想定しなければならない。当然、科学者による科学者自身の諸活動についての報告には説明が含まれていないかもしれない。しかし、それは別の問題である。

0.4.3.2

それならば、私には、科学者たちの振る舞いかたは安定した自然主義的な記述として押さえることができるように思われる。科学者たちが自分たち自身でそうしたことを行なってきたという事実はただ、自己-記述が可能な動物についてわれわれが語っているということを意味しているにすぎないようにも思われる。

0.4.3.3

それならば私は尋ねよう。科学者が自分自身の諸活動の記述を適切なものに行っているものはなんなのだろうか？これについての答えはもちろん明らかである。科学者たち自身の諸活動についての科学者の行なう報告は適切なものである。すなわち、そういった報告は、彼らの報告している行為と報告の形式とが方法の使用であるという事実によって、自分たち自身と他の人々に行為の再現可能性を与えている。[科学者の報告が再現可能性を与えているということができれば]そういったものであるなら、人間のどんな活動でもそれが方法的であるとして適切に記述されうるなら、適切に科学的に記述されているとってよいのではないだろうか？ こういったことは十分明らかであるように見える。

0.4.3.4

残された疑問とは、人間の諸活動のどの範囲が方法的なのか、ということである。この疑問は研究の課題である。この疑問がこれから提示される研究とこれまでの従事してきたそれに続く研究群を作り出してきたのだ。(人間の諸活動が記述可能な形で方法的であるすなわち方法的な行為であるならば、自己-記述が用いられているかどうかといったことはまったくレリヴァントではないと思っている。すなわち、後者はただより精緻化された可能性だと思われるだろうということだけである。実際、多くの偉大な科学者たち彼らの手続きの適切な報告を作っていない。すなわち、他の人々が彼らのためにそれをしてくれたのだ。その達成された知識の多くが安定的であるにしろ、これは、数学においてそうであったように、「証明」という概念がわかり得るというというような事実のおかげである。)

0.4.4

そうであるので、まさにあるがままの姿で科学が現存するという事実は、第一に人間の諸活動が記述可能であるということの強い兆しと、実際、このような社会学の存在可能性を保証しているといってもよいような強い兆しをもたらしてくれている。すなわち、科学は、この世界の生の事実をナイーブに探求してきたのだ。われわれはその諸活動が方法的に記述されうるといった類の動物である。一度、われわれが存在可能性という問いの形から実在性についての問いに向きをかえれば、当然、われわれはすでにとても多量の人間の諸行為についての科学的な記述の持ちあわせがあることを見ることになるだろう。すなわち、もろもろの科学者の諸活動の報告群である。

このような考え方が「社会学的記述」における「コメンテータ機械」の背後にあったのである。

註

- 1) 文献にあるように、以前、筆者らは、「社会学的記述」について訳文を作成したことがある [岡田 1995]。筆者はその企画において訳文作成の最終責任者であり解説文も担当していたため、当時、Wes Sharrock, Rod Watson, Graham Button, Mike Lynch など代表的なエスノメソドロジストに翻訳のアドバイスを求めた。一度は出版を試みたものとして、南、海老田両氏が難解な翻訳に欠けたエネルギー、多大なる努力に敬意を表したい。
- 2) この点について、MCA はおもに記述の事実確認的 (constative) な側面を扱っているようにみえる。あるいは、MCA は、事実を記述するという一方で専ら事実確認的にみえるカテゴリー化には、すべからく行為遂行的 (performative) な側面を伴ってしまうということを指摘するものである。たほ、CA は、発話の行為遂行上 (performative) のメカニズムを扱うものである。

文献

- Austin, John. 1955. *How to do Thing with Words*. Oxford Univ. Press. =坂本百大訳 1978 『言語と行為』大修館書店
- Lynch, Michael, 1993. *Sicentific Practice and Ordinary Action*. Cambridge Univ. Press. =水川喜文・中村和生 (監訳) 2012 『エスノメソドロロジーと科学実践の社会学』勁草書房
- 岡田光弘, 1995. 「観察科学としてのエスノメソドロロジー—初期エスノメソドロロジーを貫くもの—」『現代社会理論研究』 5: 137 - 147.
- Sacks, Harvey, 1972. 'On the analyzability of stories by children,' Gumpertz, J. J. and D. Hymes (eds.),

Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication. New York: Holt, Reinhart and Winston, 329-45.

Sacks, Harvey, 1984 'Notes on methodology.' in Atkinson, M, J. & Heritage, J. (eds.) 'Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis.' pp. 21-27.

Sacks, Harvey, 1992. 'Appendix Introduction 1965,' Lectures on Conversation I. Oxford: Blackwell Publishing. Pp. 802-05.

Schegloff, Emanuel, 1992. 'Introduction,' Lectures on Conversation I. Oxford: Blackwell Publishing. Pp. iv- I xii.